

昭和二十二年

《昭和二十二年は、新年や早春がなく、春の句から始まる。また、季節と俳句の順序も合っていない。》

《前年の十一月、雑誌『世界』に桑原武夫が『第二芸術——現代俳句について——』を發表した。これは黙榮にも相当の衝撃を与えたように、掲載雑誌を庭先に放り出し、それでも気が済まずに穴を掘って燃やして埋めたと言っていた。彼の怒りは更に、大家たちの反論が桑原を論破するに至らない事にも向けられた。この両者への怒りは永続し、昭和四十年代になっても第二芸術に話が向かうと激することがあった。》

昭和二十二年の新春、早春というのはそんな騒動の真つ最中であつたこともこの時期の句が無い原因かもしれない。》

茎立の葉かげ重ねて昼深し

読みⅡくきたちのはかげかさねて ひるふかし

季語Ⅱ茎立(春)

茎立ちは、植物の中心の茎が伸びる事。野菜などでは花を付ける為の成長で、とうがたつ、という。野菜でとうが立ったらもう食べられない。この句の植物が何なのか判らないが、重ねて昼深し、と言っているのだからかなり大きな植物、典型的には煙草を思うが、煙草は作ってはいなかった。

トウモロコシも考えられるが、この句が以降の句の前に作られたのなら季節がずれてしまう。

岩がまの崩るゝ道や木の芽萌ゆ

読みⅡいわがまの くずるるみちや このめもゆ

季語Ⅱ木の芽(春)

木の芽は、このめと読んで一般的な樹木の新芽と解釈すべきであろう。これをきの芽と読むと山椒の芽という事になる。岩がま、は出典意味共に不明。岩釜か岩構か、山道の脇にある大きな岩が崩れて通行を一部妨げているようである。

揺れやまず山吹たわむ溪しぶき

読みⅡゆれやまず やまぶきたわむ たにしぶき

季語Ⅱ山吹(春)

谷川のしぶきと風にあおられて山吹の花が揺れておる。単純といおうか、平凡といおうか黙榮にしては素直な句である。主語で、季語である山吹に「揺れる」と、「たわむ」の二つの動詞がある事はちよつと問題で、一考を要する。そういう実験なのかもしれない。

堀り残す独活の芽立ちや別れ霜

読みⅡほりのこす うどのめだちや わかれしも

季語Ⅱ独活(春)、芽立ち(春)、別れ霜(春) Ⅱ季重ね

情景は判るし、きれいだであるが、春の季語が三つある季重ねで、何が主題なのか判らない。実験句であろう。

独活は前の畑の石垣沿いの日溜りになるところにあつた。冬にはもみ殻で困ったりして手入れもしてそれなりの品質と量を収穫していた。堀り残されて青い芽が出た独活は所謂独活の大木となり、子供のちゃんばらの良い稽古台になる。

葱坊主喜雨のすずろにそそぎけり

読み||ねぎぼうず きうのすずろに そそぎけり

季語||葱坊主(春)、喜雨(夏) ||季違い

喜雨は早魃の末降る喜びの雨。すずろは音も無く、と部品は判っても、詠み手の言わんとするところが判らない難解な句である。

葱坊主というのは、薄皮が開くと複雑な形をしているので、雨が降り注ぐ様子と言うのは詩人黙榮の心を掴む物があったのかもしれない。

音もなく春ゆく川の水ゆたか

読み||おともなく はるゆくかわの みずゆたか

季語||春ゆく(春)

音もなく、水豊かに流れる川というのは家の近所には無いので、ゆりの実家の中巨摩郡玉穂村乙黒での句かもしれない。甲府盆地中央にあるこの辺りの川は、水が川幅一杯になって悠然と流れる。

雨後の道高這う蟹に虹あかり

読み||うごのみち たかはうかにに にじあかり

季語||蟹(夏)、虹(夏) ||季重ね

高這う、は出典意味共に不明。高には、高望みのように分不相応という意味があるので、蟹が雨に浮かれて、分不相応に流れから離れたところを這っている、という情景であろう。

朝虹や露ふりこぼす花茨

読み||あさにじや つゆふりこぼす はいばら

季語||朝虹(夏)、露(夏)、花茨(夏) ||季重ね

きれいな情景であるが、無茶苦茶に季語が並んでいる。

『目には青葉 山不如帰 初鯉』みたいな句である。

七夕竹深夜の風にひそと鳴る

読み||たなばただけ しんやのかぜに ひそのなる

季語||七夕竹(夏)

泰元の為に七夕竹を飾ったのであろう。竹なら売るほどあるし、元小学校教師の榮助は七夕に飾るような小物を作るのは嫌いではなかった。

ただし、手先は器用ではなかった。

ゆりは器用だったし、文系の榮助に対して、思考回路も理系だった。時々、榮助を論破してしまうこともあった。今なら「リケジョ」として薬学部か何かに進み、研究開発を目指したかもしれない。

星祭了えし雲漢夜々に澄む

読み||ほしまつり おえしうんかん よよにすむ

季語||星祭(夏)

甲州は山に囲まれている為に空は狭いが暗く、星がきれいな所である。当時は街灯やイルミネーションも無く、暗い空では天の川も簡単に視認できたであろう。昭和五十年代、東京エレクトロンが進出、イルミネーションで夜空が明るくなってしまった。ゆりはこの事を繰り返し嘆いていた。

濯ぎ水草に溢れて虹明り

読み||すすぎみず くさにあふれて にじあかり

季語||虹(夏)

何かを洗っているのであろう。当然農作業であつて衣類の洗濯ではない。榮助はそんな家事はしなかった。

農作業であるから、濯ぎ水も大量である。溜め水で、桶に夕立ちの雨水が溜まりきれず溢れる、と言う光景なのかもしれない。

暮れて尚明るき夏至の外仕事

読み||くれてなお あかるきげしの そとしごと

季語||夏至(夏)

この年、昭和二十二年にはまだ夏時間は採用されていなかったが、この句では時計を見て働いているのではなく、太陽を見て働いているので夏時間は関係ない。夏至の頃の最大の農作業は麦刈りであるが、この句からは麦刈りの切迫した作業状況は感じられない。

奥岳の郭公ひびく泉かな

読み||おくだけの かっこうひびく いずみかな

季語||郭公(夏)、泉(夏) ||季重ね

家の周りに一般的に奥岳と呼ばれる山はない。地名としての奥岳を調べると、福島の安達太良山近くの温泉とあるが、季節的にそんなところに遊びに行っている暇は無い。

家の周囲にいくらかでもある山の中から見繕って比較的奥まった山を適宜奥岳と読んだものであろうが、句は奥岳の中に分け入っている状況を詠んでいる。謎の句である。

刈り麦を夏至の日照雨の鳴らしすぐ

読み||かりむぎを げしのそげえの ならし過ぐ

季語||刈り麦(夏)、夏至(夏) ||季重ね

米かべえ(かばい||節約)の大麦の麦刈り風景である。二毛作の乾田では、大麦は刈り倒れないし刈り干といって、刈つてその場の地面に直接に平たく薄く並べて干した。気温も湿度も高い時期なので天気が良い事を願う事の情切なりで、ここで雨に降られるとカビが生えたり、芽が出て腐ってしまったりする。

夏至の時期の不安定な天気、晴れたので麦を刈り、田んぼ一面に並べられたところに天気がばらばらと音を立てて過ぎていく。狐の嫁入りか、だったらたいしたことはないが。

湧口の草かきわけて泉汲む

読み||わきぐちの くさかきわけて いずみくむ

季語||泉(夏)

どこかに出かけての句であろうか。とはいふものの、私の子供の頃には、家の近所にはなかったが、藤井田圃即ち小学校方面に行く途中に、田舎の餓鬼が飲んでも腹を壊さない程度の水が沸いている個所が幾つかあった。野の泉の水を飲むには出来るだけ湧き口に近い所から飲みたいのは人情である。

冬風や柿剪定の鉢冴え

読み||ふゆなぎの かきせんていの はさみさえ

季語||冬風(冬)、剪定(冬) ||季重ね

柿は強く剪定する。「柿は仇に取らせろ」という言葉もあり、収穫からし

て、竹竿の先を挟み状に切った「竿鋏||さおばさみ」という道具で枝ごと折り取ってしまう。

冬の静かに晴れた日に柿の剪定をするのは、強い剪定だけに作業の前後の違いが良く見えて気持ちが良い仕事であったであろう。

蝶は凍て枳殻垣は刺固し

読み||ちようはいて からたちがきは とげかたし

季語||凍て蝶(冬)

凍て蝶は冬まで生き延びてほとんど動かずにいる蝶。枳殻の刺というのは枳殻の気持ちが無視すれば、あの程度の実を守る防衛兵器としては不必要に長く鋭く獯猛である。枳殻||北朝鮮説。

柩かく素草鞋に踏む冬の草

読み||ひつぎかく すわらじにふむ ふゆのくき

季語||冬の草(冬)

かくは担ぐ(かつぐ)の意味。江戸時代、箆かきという職業があった。

当時は土葬で、墓穴を掘ったり、棺桶を担ぐ指揮をとったりする役は村人の持ち回りで行った。穴||掘(ぼ)り、と言って葬式の主役である。

素草鞋は素足に履いた草鞋で、蛇笏の句にも出てくる。

『辣蕪ほる土素草鞋にみだれけり||蛇笏』

お旦那であった蛇笏は、大地主ではなくなつた戦後もほとんど農作業はしなかつたそうであるが、辣蕪くらいは掘つたのかもしれない。

雪残る大巖めぐる水ゆたか

読み||ゆきのこる おおいわめぐる みずゆたか

季語||雪残る(春)

家の近くで詠んだ句ではないであろう。続く句ともに旅の句であるように思える。榮助には登山の心得は無かつたので、旅は人里から離れる事は無い。豊かな水が流れるのはある程度の大きな川、大巖があつたりするのは富士川か。

雪残る峯を背に遭難碑

読み||ゆきのこる みねをそびらに そうなんび

季語||雪残る(春)

峯を背に、が、「難しい言葉で脅かす」黙榮らしいが、さりとてどうと云う事はない句である。夜叉神峠辺りからの白根を想像する。

富士晴れて雪解の樹海鳶舞える

読み||ふじはれて ゆきげのじゆかい とびまえる

季語||雪解(春)

樹海と言っているのは、富士山は遠景ではなく、富士山にかなり接近している場所にいる。紅葉台あたりに登っているのかもしれない。それならば、俯瞰の風景で鳶はほぼ自分の眼の高さと同じくらいの所を回っている、ということになり、大きな風景が眼に浮かぶ。

ダムを抱く疎林雪解の風通う

読み〓だむをたく そりんゆきげの かぜかよう

季語〓雪解(春)

この句もどこのどんなダムなのか見当が付かない。疎林というのは木が少ないのではなく、季の葉を落としている為に地面に降り積もった雪が見える林と云う意味であろう。疎林を駆け抜ける真冬の凍て付くような風では無くどこか柔らかな春の気配がする風がゆく。

小鳥籠軒に吊るして野は雪解

読み〓ことりかご のきにつるして のはゆきげ

季語〓雪解(春)

寒さも緩んで、小鳥の籠を家の中から出して、軒に吊るしてみた。榮助が小鳥を飼ったとは思えないが、どこか近隣の家で飼っている鳥なのかもしれない。

織り励む姑の箴音麦を踏む

読み〓おりはげむ ははのはたおと むぎをふむ

季語〓麦を踏む(春)

機音が聞こえるのであるから、家の傍の畑であろう。母屋のすぐ東側、現在作業場や庭になっている部分は麦、トウモロコシ、野菜、などの畑になっていた。

榮助はこの音を立てていた織機を甲府市に寄付した。現在甲府の武田神社境内にある藤村記念館(ふじむらきねんかん)明治時代の山梨県令 藤村紫朗を記念した郷土博物館)にある。良い判断であったと思う。



妙織大姉が愛用した織り機。

甲府藤村記念館。

ペルリが浦賀に来た嘉永六年の銘がある。昭和三十五年位まで現役だった。

鳶低く傾き流るる南風の畑

読み〓とびひくく かたむきながるる はえのはた

季語〓南風(夏)

中八の字余りであるが、坐りの良い句である。一羽のトビが風に乗って横滑りするように斜めに飛んでいる。横滑りは飛行機では高度と速度を一気に失うので、通常飛行中行う事は無いが、大きな鳥が風の中を滑空しているのを見ていると頻りに横滑り飛行をしているのが判る。それは飛行の原理に反する飛び方であるだけに非常に恰好良い。

黙栄には風の句も多い、漁師ほどではないにしても、外で働く百姓も風に関心ではいられない。寒い暑いに直結するし、雨が降る降らないの判断基準にもなる。畑によって風の強弱があり、畝や棚の方向も日当たりと風向きは考慮しなければならぬ。地形のせいで、風が死にやすく、晩霜に遭いやすい畑というのもある。こういう畑には霜に弱いものは作らない、等の工夫も必要なのである。

もの蔭に野良の茶すする薄暑かな

読み〓ものかげに のらのちやすする はくぼかな

季語〓薄暑(夏)

夏の初め、日射しが強い日、それまで野良の茶は日溜りで啜っていたものが、今日は、日陰で啜りたい気分。

雲雀きく茶うけの砂糖手の窪に

読み〓ひばりきく ちやうけのさとう てのくぼに

季語〓雲雀(春)

榮助は酒のみであったが、甘いものも辞するものでは無かった。

この時期、砂糖は貴重品であったと思う。化学系の古い技術者や大学の先生の話を知ると、例外なく戦後すぐの時代、実験室で甘味料を合成して売り、小遣い稼ぎをした話が出てくる。

その時代多少でも手に入った砂糖。それは直に舐めるのが一番であろう。

砂浴びる雞に桃散る遅日光

読み〓すなあびる とりにもちる ちじつこう

季語〓桃(春)

遅日は春の日が長くなった様子で、春の季語であるが、雞(にわとり)がいるのは遅日光の中に散る桃の花散る下なので、ここは桃が主題の季語であろう。他にも雞を雄雌組み合わせて地飼いでいる、と取れる句がある。好平が養鶏に精出す前は地飼いであったのかもしれない。

春祭若草に坐し神楽みる

読み〓はるまつり わかくきに坐し かぐらみる

季語〓春祭(春)、若草(春)〓季重ね

近郷の春祭りは、穴観音〓三月末、氏神さん〓四月十二日、新府藤武神社〓四月二〇日、とある。若草に坐して神楽を見ると言う風景は新府藤武神社であろう。神楽の規模もここが一番大きい。

世話人の古紋服や春祭

読み〓せわにんの ふるもんつきや はるまつり

季語〓春祭(春)

黙榮ワールドの句である。村のお祭りの雰囲気は良く出ている。前後の句と組になっているようである。

昔の人はたとえ色変わりして折り目も怪しい古紋付を着ていたとしても、当番に当たれば村のお祭りを立派に仕切ったのである。

春祭了えてぬくとき雨となる

読み〓はるまつり おえてぬくとく あめとなる

季語〓春祭(春)

ぬくといは甲州特有の方言ではないと思うが、甲州の話し言葉には、暖かいという言葉はなく、全部ぬくとい、さらに音便を伴って「ぬくてえ」となる。「今日は、(雨が)降るけれど、えらいぬくてえじゃんかい」という野良声の会話が聞こえて来そうである。

晩春の野川に洗う蚕具かな

読み||ばんしゅんの のがわにあらう きんぐかな

季語||晩春(春)

蚕具は籠や竿、竿を架ける柱など蚕を飼う為の道具類のこと。

洗っているのは、主として一齡一眠の稚蚕用の道具類であろう。数万匹の昆虫の幼虫を密集させて飼うのであるから病氣への対策も重要で、道具類の洗浄、蚕室の消毒(大量の消石灰、ホルマリンやセレサンという粉体の水銀製剤を使った)を事前のみならず、蚕座の拡張時などに入念に行った。病原体にやられた蚕は「腐れ」と呼び、何より忌み嫌った。大量に腐れが出ると、その時のあるいは場所の蚕は全部駄目になり現金収入が無くなるか、がっかり減るので、農協が主宰で保険を懸けていた。

畑薄暑時く人參の種子匂う

読み||はたはくしよ まくにんじんの たねにほう

季語||薄暑(夏)

人參は夏の雨の多い時期に蒔き、秋から冬に根を太らせて収穫する。種子の匂いをしみじみ嗅いだ事は無いが、香り高そうである。

早乙女の西日に笠を並べけり

読み||さおとめの にしびにかさを ならべけり

季語||早乙女(夏)

稲は南北の方向にさくを作るようである。従って田植えの早乙女は西か東を向く事が多い。この日は西側から植え始めて東に向かって後ずさりしながら植えていつているのである。田植えが遅い所なので、真夏の太陽が照りつける。

現在は機械が入れない段々畑などごく特殊な田んぼを除いてほとんど全

部機械植えだそうであるが、当時は全て手による田植えであった。藤井田圃は麦との二毛作で、田んぼは水を入れなければ乾いている乾田である。

麦刈りをした後の田んぼに水を引き、耕運機を入れて代掻きし、田植えへと移って行った。水が豊富な土地ではないので田の水も貴重である。それぞれ水利権に従って、標高が高い田んぼから順に水を移して田んぼに水を張った。水路を経ず、所有者が異なる田んぼから田んぼに直接水を落とす場所もあった。

代掻きは馬を持っている専門業者がいて賃料で各農家を回った。私が物心ついた頃では代掻き馬は珍しい存在で、ほとんどは耕運機に変わったが、耕運機業者が賃料で回ってくるころは変わりなかった。耕運機を道路から直接入れられない田んぼは他所の家の田んぼを通すが、その権利は「馬入れ」と言って厳然としたもので、田んぼは勿論、その田んぼの中で通るコースも決まっていた。馬入れコースのある田んぼの田植えを何かの都合で先にする場合でも馬入れのコースは植えずに残しておく義務があった。

代は均すことはせず、耕運機で掻きまわしたそのまま、細い基準の綱を張り綱に添って早乙女が並び、自分の縄張り内を横移動しながら後ろに下がって植えていく。男は張り綱の移動、苗の用意、代が硬い部分の手直し、などを行った。子供の仕事は苗を過不足なく早乙女に供給していく事で、これもなかなか重要な上、泥田を縦横に歩きまわる重労働であった。

田植えの昼飯は、氏神様(富麻戸神社)境内で、志村本家は神楽殿と決まっていた。昼飯は婆さんが用意し、爺さん婆さんで運んできた。主菜は必ずなまり節の煮付けだった。

棚経の僧に逃げこむ裸かな

読み||たなきょうの そうにげこむ はだかかな

季語||棚経(秋)

お盆は旧盆であったが、八月十二、三日頃は夏蚕の上簇時期に当る為、更に十日遅らせて、八月二十三日が迎え火だった。甲州では他でも同じ理由からこの時期に盆を迎えた所、理由は同じで逆に東京と同じ新暦でお盆

を迎えた所、色々であったようである。
「裸」も強い夏の季語であるが、季語としては、日を限定する棚経（秋）の勝でこれは盆の句である。

大早の暑気衰えず秋立ちぬ

読み〓たいかんのしよきおとろえず あきたちぬ

季語〓秋立つ（秋）

梅雨明けに日照りが続いて、八月になったけれど、暑さは一尙衰えない。

《次の句から急に春に戻る。これはいくらなんでもおかしい。万年筆で手書した原稿であるので、訂正は面倒である。前後を間違えたがそのままにしたという可能性がある。ここで順序を並べ替えるのは可能であるが、あえて黙禱手書きのままの順序のままにしておく。》

魚板鳴る寺苑明るく春の雨

読み〓ぎよばんなる じえんあかるく はるのあめ

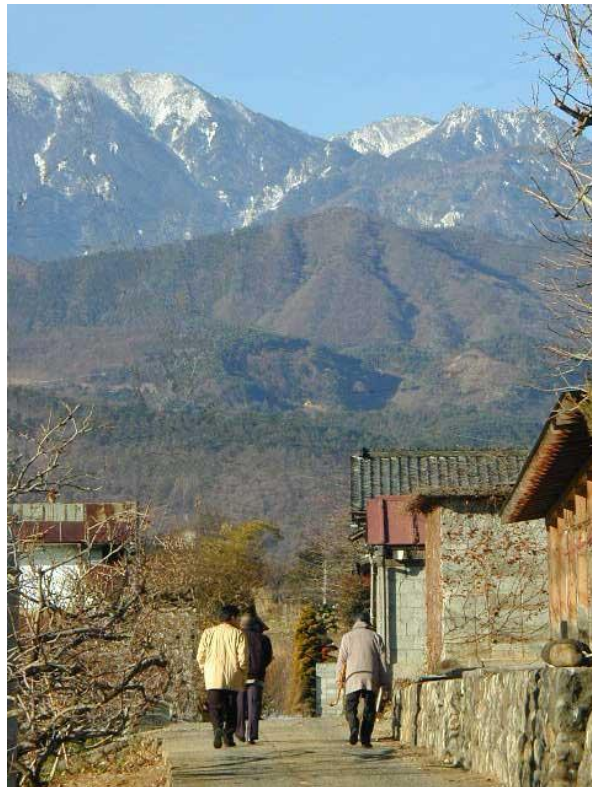
季語〓春の雨（春）

魚板はお寺の軒先などに下げ、それを敲いて時や、事柄を知らせる板。魚の形をしている事からこの名前がある。かすかな記憶であるが、延命寺にもあった気がする。

雨ぬくく雪解の端山雲まどう

読み〓あめぬくく ゆきどけのはやま くもまどう
季語〓雪解（春）

端山は、人里に近い山、大きな連山のとばくちの山、すぐそこにある山。ここでは西山こと御座石などの事であろう。



2001年元旦。右が榮助 87 歳、嬰鑠たるものである。左端、孫の空。正月の写真であるが西の端山の雪が、全然無い。

花売りに娘と蜜蜂来ては去る

読みはなうりに　むすめとみつばち　きてはさる

季語Ⅱ蜜蜂（春）

花売りの行商と云うのは見た事がない。お祭りの露店か、はたまた葎崎にでも出かけたのか。

飯田龍太によると、甲州の女は娘時代は誠にぼこしい（こどものようにうぶで可愛い）が、結婚すると豹変し、口八丁手八丁、男どもを仕切る強い女になる、のだそうである。

花売りに群がる娘も嫁に行けば気が利いて仕切りのうまい甲州の女衆（おんなし）になるのであろう。

石和出身の林真理子も、世の中の女一般を甲州基準で見ると気が利かない甘ったればかりだと言っている。

昭和二十二年　終り